

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】 丁乙

【所属】 (助成決定時) 東京大学

【研究題目】 『ラオコオン』 受容を中心とする二〇世紀中国美学

【研究の目的】 (400字程度)

本研究は、一九二〇年代から六〇年代の中国で、美学と称される領域において、いかなる思想ないし学問そのものの生成過程があったのかを解明することを試みるものである。具体的には、一八世紀ドイツの理論家にして文学者 G・E・レッシングの著書『ラオコオン』(一七六六)をめぐり論争を視点として、重要な三人の論者、朱光潜(一八九七～一九八六)・宗白華(一八九七～一九八六)、銭鍾書(一九一〇～九八)を中心に考察を進める。『ラオコオン』は詩と絵画の関係を主題とする西洋近代芸術論の古典であり、前近代から同様の問題に関心を寄せ続けてきた中国の学者にとって、自国文化を近代的に再構築するうえで格好のテキストであった。この著作の受容を通して、単に西洋の学識がいかにか中国へ紹介されてきたかのみならず、それら西洋思想への反応の根底にある中国の伝統的文化との有機的な関係性を考察することを目指している。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

近代中国を代表する二大美学者の朱光潜・宗白華と、文学研究者銭鍾書の論を個別に考察するが、それら考察を個別論にとどめず、数多くの課題を共有する彼らの応答を相互比較することによって、彼らの学術的関係を有機的に示した。

朱光潜は、20年代、30・40年代、60年代に継続的に『ラオコオン』を論じており、その内容は中国美学全体のアイデンティティの変容とともに展開する。すなわち、早期は心理学・教育学に傾倒して美学を社会や人生の問題解決のツールとし、中期には純粋な学術的考察を進め、晩期にはマルクス主義の枠組みの下で捉え直したという変遷がある。また本論はドイツ・ヴォルフエンビュッテルにて資料調査を行い朱光潜の『ラオコオン』中国語訳の精度と独自性を検討した。続いて、宗白華の『ラオコオン』論(1957)、それを支える彼の30年代～60年代の中国芸術論を検討すると、彼は初期では中国の古典哲学を直接に芸術現象に応用したが、50・60年代になると、古典哲学を芸術現象の背後の宇宙観とし、儒家と道家が相互補完する体系を構築した。

一方、銭鍾書の『ラオコオン』論(1939、1962)からは、彼の学問的スタンスがまず確認できる。彼は朱光潜・宗白華と異なり、東西を問わず、芸術作品は芸術である点で普遍性があるとし、それによって東西の芸術論の比較検討に新たな可能性を切り開いた。銭鍾書は、詩は絵画より豊富な表現の可能性があるを持つと主張し、重要な諸文学論を提示した。そのうち、李白の「洞庭湖西に秋月輝き、瀟湘江北に早鴻飛ぶ」や、蘇軾の「一朶の妖紅、翠にして流れんと欲す」に基づいて発展した理論はとりわけ重要である。そこで、銭鍾書は古今東西の思想を関連づけられる新たなトポスを練り上げ、中国の伝統のみならず、西洋の芸術論をも独自に解釈している。

【結論・考察】 (400字程度)

朱光潜・宗白華・銭鍾書はいずれも東西の学識に通じており、西洋思想を批判的に参照し、中国の文化的伝統を捉え直したが、美学という学問への理解や用いる手法はそれぞれに異なり、中国近代美学の多様な側面を示している。そこで重要なのは、朱光潜と宗白華の間、そして朱光潜・宗白華と銭鍾書の間に対照があることである。すなわち、朱光潜の主な学術的貢献は西洋思想の紹介・翻訳・考察、またその論述は近代西洋美学的な明晰性を特徴としているのに対し、宗白華の主要な議論は基本的に中国文化を対象とし、また感性的表現が多い対照である。そして、朱光潜・宗白華がともに中国美学を体系的に構築する意図があるのに対し、彼らより

一世代後の錢鍾書は体系的ではなく個々の芸術作品の考察に注力することで中国美学の次の段階を切り開いた対照である。彼らを考察することで明らかなように、近代中国美学は、たんに中国古典を継承したものでも、西洋美学をそのまま移植したものでもなく、古今東西の思想の重層的な交渉や、関連する学問諸分野からの要素の借用といった動きのなかから、自らの輪郭を持ちはじめたのである。